

二〇二五年度
【博士後期課程】

早稲田大学大学院文学研究科
専門科目 日本語日本文学コース

入学試験問題
※解答は別紙（縦書）

【答案作成上の注意事項】

- 1、解答用紙の最初に記されている時代・分野のうち、自分の選択したものを○で囲むこと。
- 2、「近代」以外の時代・分野の答案は、縦枙目（表裏）の共通解答用紙に記すこと。
- 3、「近代」は、解答用紙が別になっているので、それを使用すること。

*各時代・分野の試験問題は、左掲のナンバーの問題用紙に記されている。

上代	2
中古散文	3
中古韻文・中世韻文	4
中世散文	5
近世	6
和漢比較文学	7
近代	8 〽 1 2
日本語学	1 3 〽 1 7

上代 問 次に掲げる資料について、後の問一〜三に答えよ。

萬葉考別記一

○巻のうちに

[illegible]

※WEB 掲載に際し、以下のとおり出典を追記しております。

『万葉考別記一～六』(賀茂真淵記念館所蔵)

出典: 国書データベース, <https://doi.org/10.20730/300071383>

2/17

問一 資料の3行目～8行目（線で囲った部分）を正確に翻字せよ。改行は画像のとおりとし、漢字・仮名

は現在通行の字体を用いること。

問二 この資料の筆者の姓名を記せ。

問三 この資料の内容について、現在の研究状況を踏まえつつ論述せよ。

二〇二五年度

早稲田大学大学院文学研究科

入学試験問題

【博士後期課程】

専門科目

日本語日本文学コース

※解答は別紙(縦・横書)

中古韻文・中世韻文

左は早稲田大学図書館蔵『名所三百首』(104・08049)の一部である。それぞれの名所題で詠まれた順徳院・藤原定家・藤原家隆の和歌を字下げで順番に示し、注が施されている。次の設問に答えよ。

- (1) この資料の全文を、改行等そのままに翻字せよ。濁点や句読点を付す必要はない。
- (2) 須磨浦題・二首目の歌を現代語訳せよ。
- (3) 明石浦題・三首目の注を現代語訳せよ。
- (4) 順徳院・藤原定家・藤原家隆のうちから一名を選び、知るところを述べよ。

須磨浦

楠津

山崎のたけのぼるをみれば
さしづめはみづのうみをみれば
みづのうみをみれば

藤原定家
山崎のたけのぼるをみれば
さしづめはみづのうみをみれば
みづのうみをみれば

藤原家隆

山崎のたけのぼるをみれば
さしづめはみづのうみをみれば
みづのうみをみれば
山崎のたけのぼるをみれば
さしづめはみづのうみをみれば
みづのうみをみれば

順徳院

楠津

山崎のたけのぼるをみれば
さしづめはみづのうみをみれば
みづのうみをみれば
山崎のたけのぼるをみれば
さしづめはみづのうみをみれば
みづのうみをみれば

山崎のたけのぼるをみれば
さしづめはみづのうみをみれば
みづのうみをみれば
山崎のたけのぼるをみれば
さしづめはみづのうみをみれば
みづのうみをみれば

※WEB掲載に際し、以下のとおり出典を追記しております。

早稲田大学図書館所蔵

4/17

【博士後期課程】

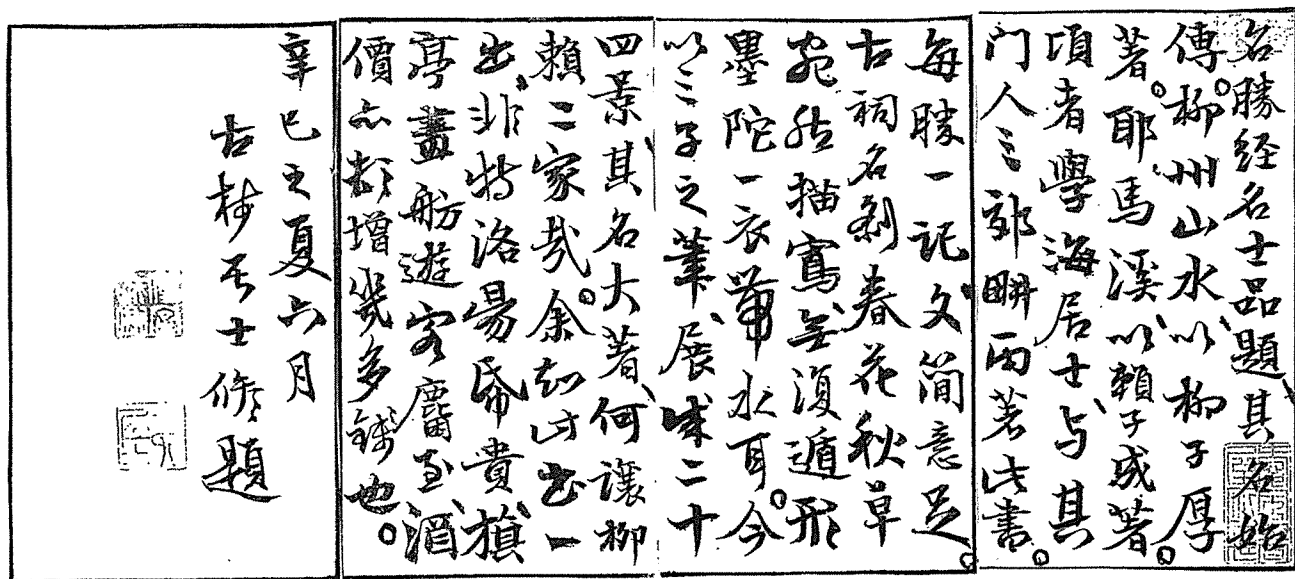
専門科目

日本語日本文学コース

解答は別紙(縦横書)

近世

次の文章は、巖谷一六が、依田学海・杉山三郊・依田畊雨の共著『墨水二十四景記』(明治十四年刊)に冠した序文である。これを読んで後の各問に答えなさい。(縦書きの解答用紙を使用し、問題番号を漢数字で記した後に、解答を筆記すること。所定の解答欄に書き切れない場合は、裏に続くなどと注記した上で、裏面を利用せよ)



※WEB 掲載に際し、以下のとおり出典を追記しております。

東京都江戸東京博物館所蔵

問一、この文章全文十七行を、施された句読点も添えて、楷書に翻字せよ。ただし、各行の冒頭にアラビア数字で行数を記し、各行の字数は影印通りとせよ。また末尾の落款印は「修字誠卿」(白文方印)、「一六居士」(朱文方印)である。

問二、この文章の現代語訳を、句読点に留意して記せ。

問三、この文章を施された句読点をそのまま生かして、書き下し文に改めよ。

問四、本文二行目にある「柳子厚」について、通常の呼称と、知る所を記せ。

問五、本文三行目にある「頼子成」について、通常の呼称と、知る所を記せ。

和漢比較文学

左の文を読み、次の問いに答えよ。

- (1) この資料の本文を全て翻刻せよ(訓点は翻刻不要。但し適宜句読点を施し、漢字は通行の字体を用いること)。
 (2) この資料の本文を漢字仮名交じりの書き下し文に改めよ。
 (3) ここに記されている内容を現代語訳せよ。

河東有練行尼常誦法华经。訪王書者一人教佑。翻
 直特為淨室。令寫此经。一赴一浴。燃香熏衣。仍於寫
 经之室。鑿壁通外。加一竹筒。令寫经人每欲出。息輒令
 竹筒吐氣。壁外寫经七卷。八年乃畢。供養嚴重。盡
 其恭敬。龍門僧法常。嘗集大衆誦法华经。以此尼
 经本精定。遣人請之。尼固辭不與。法常責讓之。尼
 得已。乃至自送付法常。等用讀。唯見黄紙。了无文字。更
 用餘卷。皆若如此。法常等慙懼。即送還尼。尼受
 以香水洗面。沐浴頂戴。遶佛行道。於七日七夜不暫休
 息。既而用視文字。如故。負觀二年。法常自向臨觀。
當見此卷
未敢言也

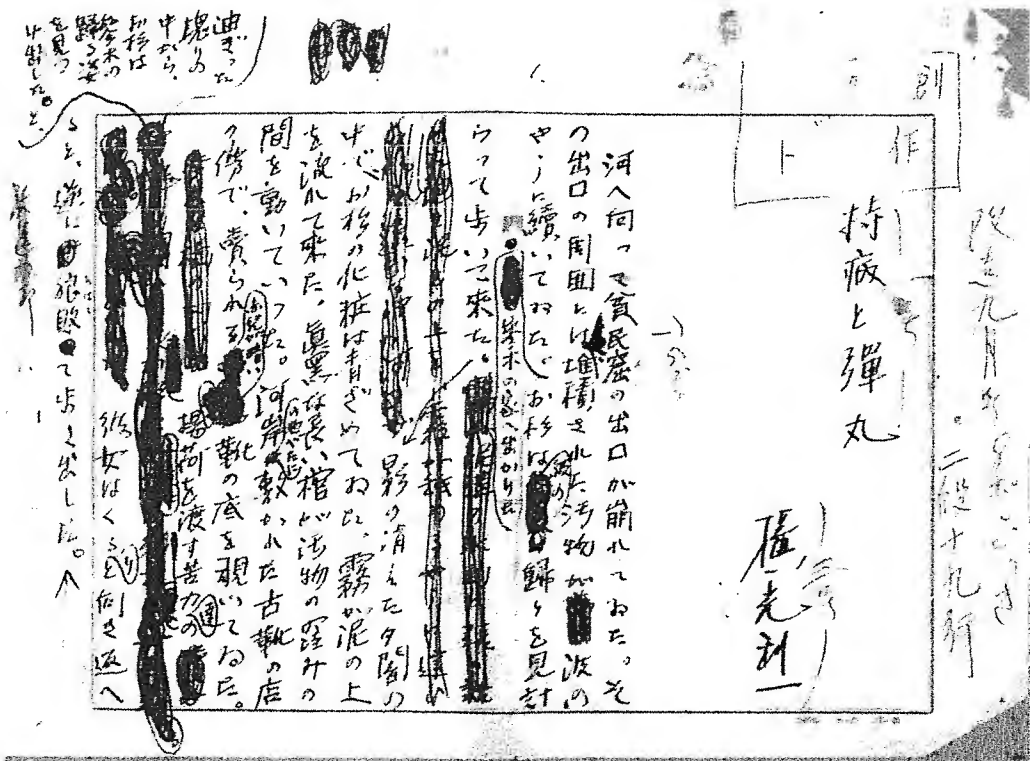
※WEB掲載に際し、以下のとおり出典を追記しております。

『冥報記：尊経閣叢刊』育徳財団,昭12. 国立国会図書館デジタルコレクション
<https://dl.ndl.go.jp/pid/1186351>

近代 次の1〜3の問いに答えよ。

1、次の資料Aは、横光利一「持病と弾丸」の冒頭部分の原稿、資料Bは長編小説『上海』(改造社、一九三二年)の「序」と二五章の冒頭部分である。これらの資料の関係について論述せよ。また、一般に雑誌や新聞に連載された長編小説について、具体例を挙げて考察せよ。(20点)

資料A



※WEB掲載に際し、以下のとおり出典を追記しております。
『山本實彦旧蔵・川内まごころ文学館所蔵「改造」直筆原稿の研究』(有松堂出版・2007年刊)112ページ掲載

資料B (続き)

三五

河へ向つて貧民窟の出口が崩れてゐた。その出口の周囲には、堆積された汚物が波のやうに積んでゐた。参木の家のへ出かけたお杉は彼の跡を辿り歩いて来た。影の消えた夕闇の中で、お杉の化粧は青ざめてゐた。霧が泥の上を流れて来た。真黒な長い裾が汚物の窪みの間を縫つて動いてゐた。河岸の地べたに敷かれた古靴の店傍で、賣られる赤児が暗い霧の底を覗いてゐた。機織を渡す苦力達の油ぎつた塊りの中から、お杉は参木の跡を見つけた。彼女はお杉の向うと向き返ると、逆に狼狽して歩き出した。が、何も狼狽へることはない。彼女は彼の家を出てから十日の間に、早くも男の秘密を讀み破る機織を拾つて来た筈だ。それに、――彼女は夕闇の中で呼吸が俄に激しくなつた。此の大途へば、冷い参木の胸を叩き得る手腕を感じて、昂然として来た筈なのに、――お杉の背中は乳男の後ろで張り結んだ。彼女は数々の男の群れを今は忘れて進上した。毎ひ疲れた狼狽した狼は河海の上のバナナの皮を踏めてゐた。虫歯抜きの老婆は貧民窟から車道を抜いて出て来ると、舟端に腰を降ろして銅貨の面を舐め始めた。お杉は河岸に立つてお杉の姿まで近づいた。しかし、彼は河へ行くお杉には気付かなかつた。

人は平気した。お杉は意思とは反対に霧の降りた海を見た。海にはいつばいに漂うた舟の中で、驚へられた排泄物が露出したまま静に水平を保つてゐた。参木はお杉の前になつた。彼女は彼の後から彼の家まで歩かうと思つた。すると、十日間の過夫が、参木の知らない彼女の淫らな過去が、お杉の懐しさをうち叩いた。

お杉は彼との肉體の間に、反感を感じた。化粧した顔が、重くつたりと下つて来た。希望が歩く時間には振り回された。愛情はただ参木の後姿に絡つたまゝ、沈み出した。すると、お杉は通るかかつた黄包車を呼びとめて、参木の面前を駆け抜けた。

参木は車體の上で驚きながら揺られていくお杉を見た。瞬間、彼は新鮮な空気の斷面を感じて直立した。彼は黄包車を呼んだ。彼は彼女の後を駆けさせた。しかし、彼は逃げるお杉を追はねばならぬ原因がどこにあるのか分らなかつた。ただ夕暮れの疲勞の上に、不意に聞いた戀想に打たれた自分を感ぜると、彼は再び調れて来た。泥濘の岸邊で、黒い朽ちかけた杭が、ぼんやりと黒い泡の中から立つてゐた。古い街角で壁が二人の車を遮ぎつた。二人の車は右と左に別れていつた。

お杉は離脱した街の中で車を降りた。彼女は露路の入口へ立つと、通りかかつた支那人の肩を叩いて立つた。

資料B

序

此の作の最初の部分は昭和三年十月に改造に出し、それから順次同雑誌へ發表を續け、最後も昭和六年十月に改造へ出した。全篇を纏めるにあつて、突然上海事變が起つて來たので題名には困つたが、上海といふ題は前から山本氏との約束もあり、どうしたものか自然に人々もそのやうに呼び、またその題以外に素材と一致したものが見當らないので、そのまま上海とすることにした。この作の風景の中に出来て來る事件は、近代の東洋史のうちでヨーロッパと東洋の最初の新しい戦ひである五三三事件であるが、外國關係を中心とした此のつびきならぬ大渦を深く描くと云ふことは、描くこと自體の困難の他に、發表するそのことが困難である。私は出來得る限り歴史的事實に忠實に近づいたつもりではあるが、近づけば近づくほど反對に、筆は概観を書く以外に許されない不便を感じないわけにはいかなかつた。したがつて個有名詞は私一個人で變更し、讀者の想像力に任す不愉快な方法さへ隨所とつた。

五三三事件は大正十四年五月三十日に上海を中心として起つた。中國では近年此の日を民族の記念日としてメーデー以上の騒ぎをするが、昭和七年の日支事變の遠因もここから端を発してゐる部分が多い。

私はこの作を書かうとした動機は優れた藝術品を書きたいと思つたといふよりも、むしろ自分の住む惨めた東洋を一度知つてみたいと思ふ供つぱい氣持から筆をとつた。しかし、知識ある人々の中で、この五三三事件といふ重大な事件に興味を持つてゐる人々が少いばかりか、知つてゐる人々も殆どないのを知ると、一度はこの事件の性質だけは知つておいて貰はねばならぬと、つい忘れてゐた青年時代の熱情さへ出て來るのである。

昭和七年六月

横光利一

2、次に掲げる四つの資料について、作品や挿絵の場合は作者名・作品名、雑誌目次の場合は雑誌名・主要執筆者名を答えた上で、作品や挿絵についてはその内容や執筆の背景、発表媒体との関わりなど、雑誌の場合は文学史上の意義などを述べよ。(各10点)



※WEB掲載に際し、以下のとおり出典を追記しております。
日本近代文学館『名著複刻全集 尾崎紅葉『金色夜叉』前編』

②

塵 埃

「原稿出切」と二面の編輯者は叫んで、兩手を伸し息を吐き、やがてゆらゆらりと、ストーブの側へ寄つた。炎々たる火鉢の悪どく暑くるしいストーブを煙草の煙で取捲て、破れ椅子に座してゐるもの、外套のまゝで立つてゐるもの、議會の問題や情夫殺しの消息、明日の雑報の註釋説明批評で賑つてゐる。「築島君その女は美人かね」編輯の岸上が一席の中へ割り込んで問を發した。「實際いゝ女ですよ、青ざめて沈んでる所は可憐です、僕はあんな女になら殺されても遺憾なしですね裁判官たるもの宜しく刑一等を減すべしだ」三面の外勤築島は、煤けた顔に愛嬌笑いをして、表情的に云ふ。

「そんなのろい男は、殺されたくても、女の方で御免蒙むるさ」

「先づ何であらうと、僕は天命を保つて、充分に面白い日を送りたい、いくら色男になつても、出刃庖丁でずばりとやられちや駄目だからね」硬派の大澤が立ちかゝつた。

「安心し玉へ、見渡したところ、一席中那麼心配のありさうな人はないから、まあ互ひに銀座のほこりを毎日吸つて、ほこりの中の微菌に生血が吸はれつちまうまで生きてるんさ、つまり天壽を保つ者は清し崩しに枯れて行くんだよ、しかしね、稚い木が嵐に折られてるのを見ると、多少風情があるが、虫に喰はれた枯木を見ると淺間しくなる、世間にはこんな枯木的人間が到處にあるぢやないか」

「岸上流の哲學か」と大澤は時計を見て、縁の削げた山高を渡り、「どりや枯木伯大枝の駄法螺を聞きに行かうか」と、戸口へ行つた。

「枯木でも風が當りや鳴んだ、大枝なんか、つまり悲鳴を擧げてるんさ」

一席はそれ／＼自分の席へ歸つて、編輯局は暫らく静になつた。予は北側の机で、窓硝子の壞れから吹き込む鋭い風に、背筋を揉まれながら、小野道吉君と差向ひて、校正に従事して、局外から編輯の光景を窺つてゐる。南米遠征の企ての破れてより、何か有望の事業に取かゝる迄の細口のためにと、或人の周旋でこの社の校正掛となつたのだが、何時の間にか、もう三月月になつた。こんな下らない仕事を男子が勤めてゐて溜るものかと思ひながら、詮方なさの一日逃れて、撼天動地の抱負を胸裏に潜め、鐵錘鎗で鍛へた手に禿筆を握つて、死灰の文字をほちくつてゐるのだ。で、校正刷の堆積が一先づ片付くと、予は机に肘をついて、外ながら外交記者の壯語澤山の太平洋に耳を傾け、あの人は、毎日内閣や議會に出入し、天下の名士と席を同うして語り、酒汲かはして懇談する身でありながら、何故立身榮達之道を開かず、ストツて炙つた食パンを喰つて、鬢髮徒らに白線を加ふるに至つたのであらう、明けて二十六となるべき予は、社中最も年少の組であつて、今こそ破れ布巾で髪蓬々としてゐるが、明年を思ひ明後年を考へれば、想像の糸は己れを中心に、幾百の豊かなる繪畫や小説を織り出す。艶麗な景も浮べば、勇壯な潮も湧く。今二三日で四十歳になる、五十歳になると云ひながら、腰辨の身を哀れとも感ぜず、無駄話に笑ひ興じてゐる彼の人々の氣が知れぬ。予は若しも四十歳まで、この藤椅子の網が尻ですり切れるまで、この渦巻く編輯局の塵埃を吸はねばならぬと、天命の定つてゐるとすれば、未練はない、今日此處で舌を嚙んで死んで見せる、食パンの味は一度で澤山だ、三百六十五日晝の辨當にして味ふ必要はあるまい、自分の一生が食パンだとすれば、二三年経験すれば足つてゐる、何も五十迄も六十迄も食パン生涯を續けるにも及ぶまい。

※WEB掲載に際し、以下のとおり出典を追記しております。

日本近代文学館『名著複刻全集 正宗白鳥『紅塵』』

9/17

④ 萬延元年のフットボール

(連載第三回)

大江健三郎

5 スーパー・マーケットの天皇

晴れたつた酷暑の朝、土間にある蓋をした井戸の手押しポンプまでが凍つたので、僕と弟は、狭い桑畑をへだててすぐ湛木の茂った山腹につらなる、われわれがかつてセダワと呼んでいた細長い裏庭の井戸に、重い釣瓶を落して水をくみあげた。まず弟が最初の釣瓶の水を獨占して、ながながと顔を洗い、頭を洗い、耳のうしろまで洗い、上唇を剃きだして執拗に胸や肩をこすりつける。僕はかれの脇に立つて所在なく釣瓶が明渡されるのを待ちながら、子供の時分には寒がりだった弟が性格を改造したのを認めた。弟が、おそらくは意識して無防備に僕の眼にさらしている裸の背に、鈍器で殴られて皮膚と肉の組織が潰れたとす黒い疵痕がある。それをほじめて見る僕の胃には、自分の肉體のこうむつた苦痛の記憶がよみがえるような具合に、厭なシビクがつたわつてきた。

なお僕に釣瓶が廻つてこないうちに、思いがけず桃子がセダワまで、土間を横切つてウニのお化けを連れてきた。容貌魁偉な谷間の青年は、この寒氣の激甚な朝に、草色の作業ズボンと、指がなかくばかれるほどにも袖の長いシャツを着ているのみだ。そして絶えまなく震えながら丸つくとく巨きな頭をうなだれ、僕がそこにいる限り脇腹になにひとつ話しはじめの氣配がない。かれは寒氣によるばかりでなく、肺の内奥から深く消耗しているように根深く青ざめてみえる。結局、僕は顔を洗うことを断念して、かれらに密談の機会を與えてやるべく圍爐裏の傍にひきあげた。もつとも今や僕は顔を洗わないことに痛痒を感じなくなつてゐる。齒に到つては數箇月もみがかないので默の齒さながら眞黄色だ。そしてこの性格改造は、僕がそれを意識して選びとつたのではない。死んだ友人や養護施設に入つた赤んぼうが別れ際に、僕に遺していつたものだ。

「あの青年は寒さを感じないのかしら、蜜? お寺の境内に居た時も秋みたいな服装だったけれども」と妾が鷹匠たちに氣をつかつてひそめた聲でいつた。

「寒さは感じるだろう、ひどく震えていたよ。かれは、ストイックな忍耐力をそなえた變り者として仲間の注目をあびるために、ああして眞冬にも外套や上着なしでゐるのさ。谷間でもただそれだけで尊敬をもちとることは難かしいかもしれないが、それに加えてあいつの容貌や傲岸に他人を無視する演出はなかなか獨特だからなあ」

「それくらいのこと青年グループの中心人物が生れるのだとしたら素朴な話ね」と妾は疑わしげにいつた。「ところがそうした無邪氣な演出をする變り者が、必ずしも單純な心理構造の持主とかざらないところに、村の若者たちの政治的相互關係の複雑さがひそむわけだ」と僕は、悪い記憶の群がむくむくと蘇えつてきそうになるのを急いで押えつながらいつた。僕はつねに谷間の子供たちの政治において劣等者だったし、それは弟も同じことなのである。

武州公秘話

省線電車の射撃手
人を喰つた機關車
うろたへ者
鬼道
モンマルトルの女
魔人(連載長篇)
大阿呆官一千一夜(不良老年クラブ・ナンセンス)
★學園セクシヨン(千葉醫大・五高入高)
★秋の夜のレコード
★ウオガングオグ(ボーイス&ガールスお洒落の頁)
★阿呆 宮いたづら小僧教育
戀のリンデイ
太平洋横斷インチキ列傳
寛足立六三郎(三)
精作(三)

アメリカ

現代薔薇園奇聞
ヨット帆走の閑談
スポーツ・アラ・モード
秋季リーグ戦前觀
米國恐るゝに足らず(日米水泳戰)
新井育(三)

惡人傳

生れつきの極惡人
殺し人職業
高田義一郎(二〇)
森下雨村(二)

市街
トレイダ・ホーン
誰だ? 首飾を發明した奴は!
指環・下ツキ
サトウハチロー(三)



女・女・一列縱隊
面會の神様
忠坊に與へるの書
お白狐様
さみしい夫人
ラブシーン
おフクさん
東洋趣味の夫人
ホテル女
サトウハチロー(三)
市川小太夫(六)
北村小松(六)
正木不如丘(六)
高田稔(三〇)
中村正常(三〇)
和田邦坊(三〇)
岩藤雪夫(三)
渡邊紳一郎(三)
松井翠聲(三)

列強の樂屋裏

(座談會)

山田邦彦
伊東健
大月貞
廣瀨武
宮武
赤衛軍に追はれて
ミスター・セツヤク
いざ這

懷しきイビキよ!
サムの女嫌ひ
至急大至急
まぐす猫急
魔術師
百萬弗!
M・サマコイス(三)
J・マツカリ(三)
W・H・アブソン(二六)
L・ドイ(三)
J・ステバニー(三〇)
F・S・ジャコフス(三三)

英國の機密室

アストン・マーシャ

新青年プリズム(スポーツ・國際問題・最新科學)

3、次の文章は前田愛『近代読者の成立』(初刊、有精堂、一九七三年。ただし引用は『前田愛著作集』第二巻、筑摩書房、一九八九年による)の一節である。ここで述べられている黙読という読書形態の登場の意義について、筆者の趣旨を踏まえながら、できるだけあなたの研究対象、研究テーマに関係づけながら、具体的事例を示して論述しなさい。(20点)

二葉亭は「予の愛読書」の中で、散文のリズム(文調)に触れてつぎのように語っている。「日本文で文調を出したいと思うて、文章を書く時には文調が恐ろしく気になった」。この「文調」は美妙が「吾々の言文一致体」で「声調の便利が新語格よりも旧語格の方に備つて居る」と述べた際の「声調」とは意味合いを異にしている。二葉亭にとって日本在来の文章(美妙のいう旧語格)の文調は「どうも変化が乏しく抑揚頓挫が欠けて居るやうに思はれ」(同)たのであった。このような認識はグレイの朗読から知ったゴンチャロフの「文調」の魅力にもとづいている。美妙のいう「声調」が外在的リズムであったとすれば、二葉亭の求めた「文調」は作者の詩想と密着した内在的リズムでなければならず、グレイの朗読が増幅してみせたゴンチャロフの「文調」はその具体的な実現なのであった。

文章によつては或程度までは朗読の巧拙に拘はらず文章其物の調子があつて、従て黙読をしても其者に調子がつて、どんなに殺して見ても調子だけは読む者の心に移る文章がある。(同)

ここには音読によつてはじめて顕在化するのではなく、黙読によつても触知しうる散文リズムの隠微な形式が示唆されている。それが読者の内面にもたらす共振作用に、二葉亭は文学の観念と形象へと導く具体的な手が見出したのである。二葉亭が翻訳にあたって露西亜文学の「文調」を日本文をかりて「再^{レブリエ}顕」することに、苦心経営したゆえんもここにある。

艶麗の中にどつか寂しい所のあるのが、ツルゲーネフの詩想である。……彼の小説には全体に其の気が行き渡つてゐるのだから、これを翻訳するには其の心持を失はないやうに、常に其の人になつて書いて行かぬと、往々にして文調にそぐはなくなる。……実際自分がツルゲーネフを翻訳する時は、力めて其の詩想を忘れず、真に自身其の詩想に同化してやる心算であつた……(余が翻訳の標準)

二葉亭はツルゲーネフの詩想に同化する、すなわち逍遙の「論理的読法」を異国の文学に応用する困難な作業とともに、「変化が乏しく抑揚頓挫が欠けて居る」日本在来の文章にかわつて、ツルゲーネフの「文調」を「再^{レブリエ}顕」しうる柔軟にして繊細な文体を創出するというきわめて大胆な実験を自らに課したのである。この実験の成果は同時代の読者によつてどのように迎えられたであろうか。『あひびき』について語った蒲原有明のことばに拠つて考えてみたい。

有明にとって『浮雲』は読みづらく重苦しい調子の作物であつたが、それとは対照的に『あひびき』の透明で音楽的な「インプレッション」は「到底忘れることは出来ない」ものであつた。

そのころは未だ中学に入りたてで、文学に対する鑑賞力も頗る幼稚で『佳人の奇遇』などを高誦して居た時代だから、露西亜の小説家ツルゲーネフの翻訳といふさへ不思議で、何がなし読んで見ると、巧に俗語を使つた言文一致体——その珍らしい文体が耳の端で親しく、絶間なくささやいて居るやうな感じがされて、一種名状し難い快感と、そして何処か心の底にそれを反撥しやうとする念が萌して来る。余りに親しく話されるのが訳もなく厭であつたのだ。(『あひびき』に就て『二葉亭四迷』所収)

「耳の端で親しく、絶間なくささやいて居るやうな感じがされ」たという有明の反応は、「黙読をしても其者に調子
が移つて、どんなに殺して見ても調子だけは読む者の心に移る文章」を目標に定めて、詩想に密着した文調の再現を
めざした二葉亭の意図とほぼ正確に対応している。有明は作者と読者の内密な交流がもたらす快い戦慄とかすかな反
撥について語る。読者は他人を交えることなく孤独で作者と向い合い、かれが囁く内密な物語に耳を傾ける。このよ
うな秘儀に参与する資格を許された読者こそ、「近代」の小説読者ではなかったろうか。有明の回想では触れられて
いないが、この作者と読者の心理的距離が消失する感覚をつくり出した要件として、『あひびき』の視点が「のぞき」
という、一人称のうちでももっとも刺戟的な効果を持つ視点であったことをつけくわえておきたいと思う。作者とと
もに密会の場面を覗きみる読者は共犯者の立場に身を置くように仕組まれているのである。初期の言文一致体の小説
は事件を作者じしんの口を通して読者に語りかける一人称の形式をとったものが多いが、美妙の『ふくさづつみ』に
しても、嵯峨の屋の『初恋』にしても、柳浪の『残菊』にしても身の上話もしくは懺悔譚の素朴な体裁に従っていて、
『あひびき』の精妙な視点とは格段のひらきがある。たとえば『初恋』のばあい末尾に近く「嗚呼皆さん」という呼
びかけ語が端的に示すように炉辺を囲んで老人の懐旧談に聞き入る数人の聴き手が想定されているわけであるが、
『あひびき』の視点は、本来的に黙読する孤独な読者を要請しているのである。

有明が幼稚な鑑賞力で高誦したという『佳人之奇遇』は美妙が排斥した「吟ずる」読み方で読まれたのであった。
それは蘆花が『黒い眼と茶色の目』でいきいきと描き出しているように、学校・寄宿舎・私塾・政治結社等の精神的
共同体の内部で集团的・共同的に享受された。このような享受の場は自由民権運動の敗退とともに失われて、享受の
単位は家庭ないしは個人に縮小する。美妙が読者に要請した「通常の談話態」のように読む読み方は『小説神髓』が
提示した「親子相ならびて巻をひらき朗読するに堪へ」る改良された戯作、その具体的実現としての硯友社文学に対
応するであろう。新聞小説であり、家庭小説である。硯友社文学の優勢のまゝに『あひびき』の読者が少数者であっ
たことは否むべくもない。しかし、近代読者の系譜はじつにこの少数者の中から辿られる。それは漢文崩しの華麗な
文体のリズムに陶醉して政治的情熱を昂揚させる書生達でもなく、雅俗折衷体の美文を節面白く朗読する家長の声に
聞き入る明治の家族達でもない。作者の詩想と密着した内在的リズムを通して、作者ないしは作中人物に同化を遂げ
る孤独な読者なのである。『佳人之奇遇』の読者の類型が、その朗誦に自習のペンを休めてうっとり聞き惚れる同
志社三百の寮生の姿(『黒い眼と茶色の目』に求められるとするならば、『あひびき』の読者は本を小脇に林の中を逍
遙しながら自然のささやきに耳かたむける孤独な読者なのである。有明に加えてもう一人の『あひびき』読者の姿を
記しておこう。

「片恋」は「うき草」ほど私を打たなかったが、その中の「あひびき」の自然描写は、これがまた私には驚異で
あった。こう云う自然そのものの足音や、ささやきまでも聴きとれるような、美しい描写は、とうてい人間わざ
とは思われなかった。私は、その頃としては思い切った美装の「片恋」をかかえて、中学の裏手のお寺へつづく
林の中を、ひる休みに独りでよく彷徨した。そして自分をツルゲーネフの作中の人物になぞらえ、始業のラッパ
の鳴るまで、夢見るような気持ですごした。(青野季吉「明治の文学青年」)

日本語学

日本語学を専攻する者は、次のⅠ・Ⅱ・Ⅲのいずれか一題を選択して解答せよ。

- Ⅰ 次は寺村秀夫 1991『日本語のシンタクスと意味』（くろしお出版）の一部（pp.237-240）である。この文章を読んで次の問いに答えよ。

- 1 下線部（1）の「副詞＋ノ」の例を二つ挙げ、どういう副詞かということについても簡単に言及せよ。
- 2 下線部（2）の「引退のつもり」について「(?)」とされている。なぜ「(?)」なのか、他の関係とは何が違うのか、どう位置づけるのか、について考えを簡潔に述べよ。
- 3 下線部（3）についてなぜなのか、自分の考えを簡潔に述べよ。
- 4 下線部（4）に関連して(14)(15)の違いについて、自分なりにどう説明するか、考えるところを簡潔に述べよ。
- 5 ここでは複合名詞の問題が挙げられているが、複合という現象をめぐって統語論（syntax）の問題として考えるべきか、語彙論（lexicon）の問題と考えるべきか、あるいはいずれもが関わるか、などいろいろな考え方があろう。自分の考えを簡潔に述べよ。
- 6 文法論における名詞という品詞について、考えるところを簡潔に述べよ。

3.1 名詞を主とする主従的結合——連体

3.1.0 はじめに

以下、名詞に、いろいろな品詞に属する語、あるいはその連なりが前接して、全体として名詞句を形成するさまを見ていく。

連体語句には、形態的に整理すると次のような種類がある。

- ①名詞＋ノ
- ②名詞＋格助詞＋ノ
- ③副詞＋ノ (1)
- ④その他の形＋ノ（知ってのこと、飲みながらの、～すればの）
- ⑤連体詞
- ⑥名詞的形容詞＋ナ
- ⑦動詞、形容詞の確言形（基本形とタ形）

名詞、あるいは名詞的形容詞が連体助詞を介さず、あるいは形容詞の語幹や動詞の連用形が、直接に名詞に前接すると、結合度が強くなり、全体が一語化して、複合名詞ができる。「山頂、両親、核融合」など。2.1.0 で触れた^(注10)、並立結合と、並立構造の複合名詞（「父母、姓名」など）と同じ事情である。複合語のなかの、要素間の関係を調べるのは、形態論、語構成の領域である。

3.1.1 「Nノ」および「N＋格助詞＋ノ」

名詞N₁が名詞N₂を意味的に限定する関係で結びつく最も一般的な形は、「N₁ノN₂」という形である。この形の一部は、名詞に格助詞がついた形に「ノ」が後接する形と共通するところがあるので、ここでは両者を一括して見

13/17

ていく。

「ノ」によって結び付けられた二つの名詞の意味関係は多様で、従来、いろいろな分類がなされている。たとえば、次のようである。

- (9) a. 私の辞書, 太郎のお父さん (所有)
b. 札幌の姉, 大阪の日本橋 (場所)
c. 桜の木, 梅の花 (種類)
d. 浦島太郎の話 (内容)
e. 象の鼻, カメラのレンズ (全体と一部)
f. 漫画家の加藤さん, 首都の東京 (同格(?))
g. 芥川の自殺, 父の手紙 (主格語と述語)
h. 伊勢物語の研究, 広島爆撃 (対格語と述語)
i. 廃棄物処理の問題, 収賄の証拠 (～に関する)
j. 肢体不自由児の施設 (～のための)
k. 病気の時 (?)
l. 引退のつもり (?) (2)
m. 机の上, 目の前 (?)
n. 鉄の女 (?)
o. 砂の女 (?)
p. 赤いアウディの女 (?)
q. 死の漂流 (?)

.....

こうして、たとえば新聞や小説をよみながら例を拾っていくと、いくらでもおもしろい「NノN」を集めることができるが、それを上のようにたんに意味的にレッテルをはっていても、きりがいいだけでなく、あまり意義があるとは思われない。多くの人がいうように、「どんな名詞でも「ノ」でつなげる、そこに規則などない」と思いたくなるぐらいである。

しかし、「なんでも結びつく」というのは、もちろん正しくない。たとえば

- (10) a. カメラのレンズ
b. 漫画家の加藤さん
c. 首都の東京

などは、それだけで聞いてすぐ意味がわかるが、

- (11) a. ?レンズのカメラ
b. ?加藤さんの漫画家
c. ?東京の首都

などは、ありえない言い方ではないかもしれないが、聞いてから、どういう意味なのか、しばらく考えなければ何のことかすぐには分からないのがふつうであらう。それはなぜだろうか。(3)

また、前章で見たように、「N₁ノN₂ガ……」のN₁は、ハとかモとかで取り立てられて、「N₁ハ(モ)N₂ガ……」とすることができる。

- (12) このカメラのレンズがよい。

→このカメラはレンズがよい。

が、どんな「N₁ノN₂」でもよいかというと、たとえば、

- (13) 漫画家の加藤さんが描いてくれた。

→*漫画家は加藤さんが描いてくれた。

のようにできない場合もある。では、ハ、モなどで取り立てができる「N₁」はどのような「N₁ノN₂」のそれなのだろうか。

4/17

あるいはまた、

(14) 先生、楊さんから電話です。

とはいえるのに、どうして

(15) 先生、これが楊先生から紹介状です。

というとおかしいのか。(4)

上のような疑問に答えるためには、意味だけをもととしたレッテル貼りだけではどうにもならないことは明らかである。

「N₁/N₂」という構造は、外見が簡単なだけに、その裏にあるN₁とN₂の意味関係の多様さのなかの規則性を探り出すことはむずかしい。以下に、比較的類型化のできそうなものを切り取って、いくつか見ていくが、包括的な分類

記述には程遠い。あるいは完全にすべての型を文法の範囲で捉えることは不可能なのかもしれない。なぜなら、二つの名詞を「/」で結びつけること、また（聞き手の側からいえば）その結びつきからすぐある意味を理解することの一つには、日本語についての一般的知識をこえた、その時代の社会常識のようなものが関係する部分があることにもよる。（たとえば上の(9)のo, p, q, など。）そういう性格——意味解釈を常識に依存させようとする性格——がいっそう強くなり、結合したままで始終使われるようになる、つまり一語化したものが複合名詞であると言ってよいであろう。

かつて Zellig Harris が、‘snowman’ (snow で作った人), ‘milkman’ (milk を配達する人), ‘garbage man’ (garbage を収集してまわる人) のような ‘N+man’ の多様さをあげて、それらを文からの変形によって派生するものとして記述することはできないことはないかもしれないが、一般化は非常にむずかしいという趣旨のことを言っていたことがある（1962年, University of Pennsylvania での講義）。日本語で「雪男」「雨男」「間男」「雪女」というのがどういう意味なのか分かるか分からないかは、いわゆる日本語能力(Competence)の問題とはいえないだろう。

しかしまた、どういう意味的關係が複合名詞ないし名詞連結の形成に関与するか、の法則性を探ろうとする研究が、「文要素の単語への編入 (Incorporation)」という視点からこれまでも進められてきたように、二つの名詞が「/」によって結びつけられる意味的機縁を考えることは、シンタクス部門に課せられた仕事として進められなければならない。

15/17

二 左に掲げた文献について、以下の問いに答えよ。

- (一) 画像の五行を全て翻字せよ。虫損などで読めない箇所があれば「□」で記せ。
- (二) この文献の書名と著者名を答えよ。
- (三) この文献の日本語史的意義を説明せよ。



※WEB 掲載に際し、以下のとおり出典を追記しております。

『口遊』(東北大学附属図書館所蔵)

出典: 国書データベース,

<https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100237550/30?ln=ja>

16/17

三 左に掲げた資料は、明治十八(一八八五)年刊の『簡易器械理化學試験法』(普及舎)の三宅米吉による序文の一部である。これについて、以下の問いに答えよ。なお設問の都合上、人名を黒塗りにしてある。

- (1) 三宅米吉は明治・大正期の仮名文字論者である。この時代における三宅以外の仮名文字論者を一人挙げよ。
- (2) 近代の国語国字問題のうち、文字表記に関する事柄について、知るところを述べよ。
- (3) 左の資料においては、日本語の書き方について文字表記上の様々な方針が見て取れる。具体的にはどのような方針が見られるか、例を示しつつできるだけ多く指摘せよ。

のつかいかた 志けん の 志かた に あれざる 志ま
たそのきかいのあたいのたかく 志てにやす
からざる とによる あるべし。 さればいまこれ
らのまあびをさかんに 志そのれ志にかたを
志うぶん 志ら志めん にねまづ そのきかいをにや
すから志めて そのつかいかた および 志けんの 志かた
に 志らさ志むる こそ ちかみち 志れ。 とうきよう
志はんがっこう のぶつりがく きようー
うぢ はやく ここにみる ところ ありて、みづから
てをくだして かんたんある きかいをくふう 志

つくり、またせいとを志てのこぎり かんあ のつ
かいかた に 志らさ志め、かつ かんたんある きかいを
もくふう 志志むる こと ここにと志 ありて、すでに
そのくふう せられたる きかい かれこれ かず たたく
なりたり。 これらのくふう せられたる きかいの 志
もあるものをさくねん いぎりす るんごんの にい
せい きよういく はくらんくわい にいだされ、またこ
とー あめりか にうれるれにんの はくらんくわい に
もいだされたる ところ、かのちのがく志や きようい
くかたちのうち にて ひようばん はあはだよく 志て

受験番号	
氏名	姓
	漢字

この欄以外に受験番号氏名を書かないこと。
漢字氏名がない場合は、ひらがなで記入すること。

「近代」以外の解答用紙

〔日本語日本文学〕

*選択分野に○を
記入すること。

- ・上代
- ・中古散文
- ・中古・中世韻文
- ・中世散文
- ・近世
- ・近代
- ・日本語学
- ・和漢比較文学

総 点

--

(裏) 表

——これより先の余白には絶対に記入しないこと——

(次頁へ続く)

[illegible]

3/8

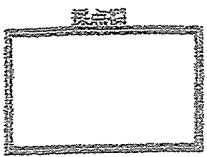
日本語日本文学(近代) 解答用紙(その一)

1



日本語日本文学(近代)解答用紙(その1)
① 2

2
②



日本語日本文学(近代)解答用紙(2)(三)

2 ③

2 ④



